

中国吉林省・延辺朝鮮族自治州における国境観光の地域的特色

Regional Characteristics on Border Tourism in Yanbian Korean
Autonomous Prefecture, Jilin Province, China松 村 公 明*
Koumei MATSUMURA

Abstract: Located in the eastern end of Jilin Province (China), Yanbian Korean Autonomous Prefecture is bounded on the east by Democratic People's Republic of Korea (North Korea) and Russia. On the border with North Korea, Mt. Changbai (Mt. Baekdu) has attracted visitors as a part of pilgrim and border tourism from Korea since the 1990's. With the development of traffic network in the late 1990's and the enforcement of Tumen River Area Development Program by UNDP, the prefecture capital city Yanji has developed to be an important node of Korean tourists' flow as well as the center of economic growth in northeast China. Meanwhile, Yanji and its prefecture have also become one of the origins of Chinese newcomers in foreign countries such as Korea and Japan. Recently, local travel agencies have proposed several routes of border tour, among which most of the tourist spots such as rural settlements of Korean traditional style, observatories with border checkpoints and bridges across the river in cities of Tumen and Hunchun, are all located along Tumen River that define the border between China and North Korea. Regional characteristics of borderland can be observed by the development of border tourism around Yanji, and also, geographical location of Yanji has been changed by the reorganization of traffic network in Northeast Asia.

Key words: 国境観光 (border tourism), 長白山 (Mt.Changbai), 延吉市 (Yanji City), 図們江 (Tumen River), 延辺朝鮮族自治州 (Yanbian Korean Autonomous Prefecture)

- I はじめに
- II 延辺朝鮮族自治州の地域概観
- III 長白山と国境観光
 - 1) 韓国人の長白山観光
 - 2) 延吉市の成長
- IV 図們江と国境観光
 - 1) 図們口岸とその周辺
 - 2) 防川・中朝露三国国境
 - 3) 現地住民と国境観光

V おわりに

I はじめに

延辺朝鮮族自治州は、中国・吉林省の東端部を占める「少数民族自治州」である。1978年末以降の改革開放政策の進展にともない、同自治州は、1980年代後半から、在日新華僑の有力な送出地域になった(山下, 2007; 山下ほか, 2008)。

* 立教大学観光学部・教授

そこで、本稿は在日新華僑の送出プロセスの解明という枠組みの中で、延辺朝鮮族自治州が有する国境地域としての地域的特色を、国境観光に焦点を当てて考察することを目的とする。現地調査は2006年から2008年にかけて遂行された。

『人文地理学辞典』によれば、国境とは、国家領域の外部境界と定義され、近年では、EU統合の進展にみられるように、国境の機能が大きく低下する場合もあるが、世界的には依然として地表空間を分割する最も重要な境界の一つであるとされる。そのため、国境または国境地域そのものが観光資源となる場合があることが指摘されてきた(Timothy, 2001; 呉羽, 2003; 三原, 2003; 千, 2004)。

国境地域は、国境線の画定と変化に関わる歴史的背景に加え、国境の分離性と透過性によって独自の地域的性格を帯びており、国境をめぐる人・財の流動など経済活動と同様に、国境地域の景観や地理的な相互作用は、観光の対象として捉えられる。

本稿で述べる国境観光、すなわち中朝国境、中露国境を対象とする観光形態は、三原(2003)によれば「展望型」の国境観光と位置づけられる。延辺朝鮮族自治州を訪れる一般の観光者は、これらの国境、とりわけ中朝国境を越えることは想定されていないためである。なお、韓国と北朝鮮との境界、いわゆる38°線は、軍事境界線(休戦ライン)であり、非武装地帯(DMZ)の存在もあって、本稿で述べる中朝国境とは区別される。

本稿で用いる人口はすべて延辺州統計局編(2006)によるもので、数値は2005年である。

Ⅱ 延辺朝鮮族自治州の地域概観

延辺朝鮮族自治州は、北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)およびロシア連邦とそれぞれ国境で接する。同州の面積は、日本の九州とほぼ同じ42,700 km²、総人口は217万5194(2005年)である。同州は、延吉、図們、敦化、琿春、竜井、和竜の6市と、汪清、安図の2県から構成される(図1)。州都(州政府所在地)は延吉市である。この地域は19世紀末から間島(かんとう Kando)

と呼ばれ、とくに1910年以降、耕作地を求めて朝鮮半島の農民による移住が急増した(伊藤ほか, 2000)。日本占領下には竜井に間島日本総領事館(現・竜井市人民政府庁舎)が置かれていたほか、「満州国」成立後の1934年には日本によって間島省が設置された。中華人民共和国建国後の1952年9月に設立された延辺朝鮮族自治区を前身に、1955年12月に敦化県を新たに組み入れて、吉林省延辺朝鮮族自治州として現在に至る。

2008年現在、同州は全国で30の「少数民族自治州」のうち、東北三省(遼寧・吉林・黒竜江)で唯一の自治州となっている。公用語は朝鮮語と中国語で、とくに朝鮮族は中朝のバイリンガルであることによって特徴づけられてきた。朝鮮独立後も中国にとどまり、中国国籍を付与された朝鮮族は、中国朝鮮族と呼称され、中国に居住する「跨境民族」¹⁾の一つ、すなわち国際少数民族の枠組みで捉えられる。

2005年における同州の総人口を民族別にみると、漢族人口が129万2,732(59.4%)と最大を占め、次いで朝鮮族81万6,244(37.5%)、満族5万6,762、回族6,660、蒙古族2,043の順である。同州設立時の1952年には、朝鮮族が全体の62.0%と最大を占め、漢族は35.8%であった(延辺州統計局編, 2006)。中でも近年にみられる朝鮮族の人口減少は、1990年代以降に急増する朝鮮族の就学ビザ・留学ビザによる韓国・日本渡航によるものであり、さらには帰国後の沿岸部大都市への流出による(山下ほか, 2008)。

この地域が注目されるのは、国連開発計画(UNDP)によって1991年に発表された「図們江地域開発計画」(金三角開発計画)であった。これは、図們江河口デルタの中朝露三国国境地帯を核に、国際共同管理の経済特区を建設するとともに、100万人規模の大都市、いわゆる「北の香港」の形成を目指すものであった。とりわけ1992年の中韓国交樹立によって、韓国企業による同州への進出と経済投資が本格的に始まるとともに、韓国人観光客が大挙して同州を訪問するようになった。この理由として、鄭(2003)は、①韓国人にとって延辺は、伝統的な民族文化や生活習慣が保存されている、いわば「郷愁」を感じさせる地域

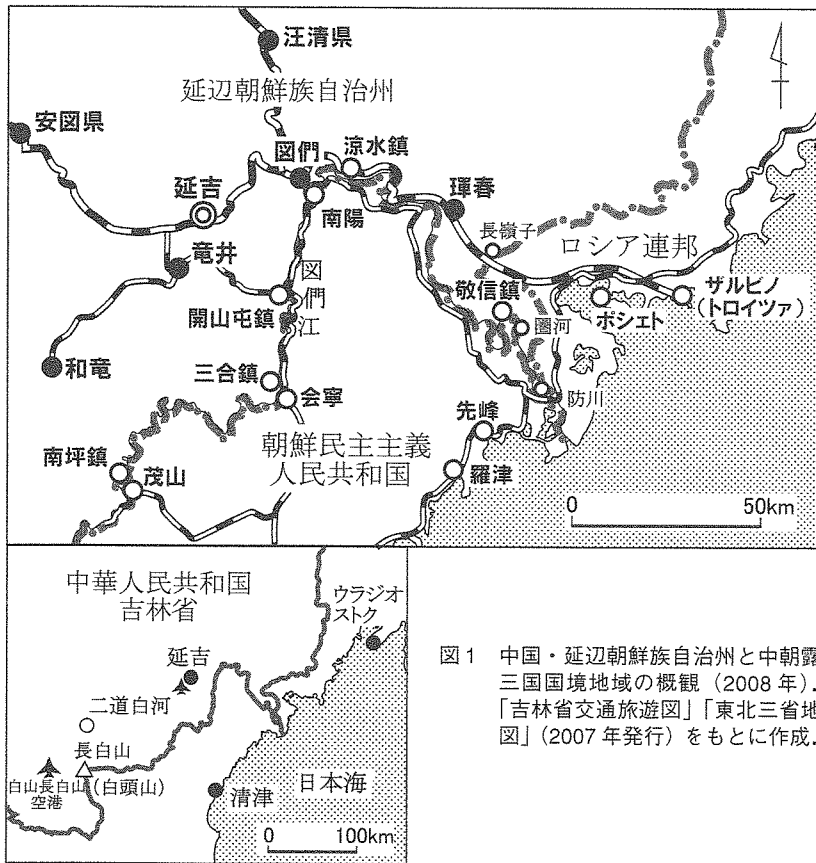


図1 中国・延辺朝鮮族自治州と中朝露三国国境地域の概観(2008年). 「吉林省交通旅遊図」「東北三省地図」(2007年発行)をもとに作成.

であったこと、②高句麗や渤海などの古代国家以来、長白山(韓国・朝鮮名:白頭山)訪問は韓国人にとっての宿願であったこと、③韓国と北朝鮮の間で民間レベルの交流が極めて困難な状況が続くなかで、韓国人にとっては延辺が「北朝鮮を代位する」するように認識されたことを挙げている。

以上のように延辺朝鮮族自治州は、その成立から現在に至るまで、国境地域としての性格を強く帯びていることがわかる。

Ⅲ 長白山と国境観光

1) 韓国人の長白山観光

長白山(標高2,744m)²⁾は、朝鮮半島最高峰とであり、とりわけ外輪山から望むカルデラ湖「長白山天池」の景観は、その山容以上に知られ、人々を魅了してきた。長白山は、中朝の国境河川

である図們江(豆満江)と鴨緑江の源流であり、さらには東北平原を北流する大河・松花江の源流でもある。長白山は朝鮮族と満州族にとって建国神話の舞台であり、民族の聖地として信仰・崇拝の対象となってきた。

韓国では1988年のソウル五輪を経た1989年に韓国民の海外旅行が完全に自由化された。1992年に中韓の国交が樹立されると、同年、仁川ー青島間にフェリーが就航するなど、韓国人観光客による中国観光が本格的に始まった。なかでも長白山は観光目的地として注目が集まった。

韓国ー長白山間の観光ルートは、当初より延吉を経由するルートを主軸として形成されてきた。これは、①長白山に最寄りの空港が延吉空港であったこと、②図們江地域開発計画を契機として、韓国企業による延辺地域への経済投資が進展するとともに、延吉では韓国人観光客を受け入れるための宿泊施設が整備されていたこと、③長白山の

開発と管理業務を延吉で担当していたこと、などが挙げられる。

1998年7月、航路として仁川－丹東間に「丹東フェリー」が就航し、仁川－丹東－延吉－長白山ルートが形成された。空路はソウル（仁川）－北京（または大連・瀋陽）－延吉－長白山がメインルートであった。1998年に韓国・現代グループによる北朝鮮の金剛山観光ツアーの開始を受けて、2000年に東草（韓国・江原道）－ザルビノ（ロシア）－琿春間に東春号（フェリー）による団体観光ルート、いわゆる「白頭山航路」が開設された。2000年8月には、ソウル－延吉直行便がチャーター便として就航し、2003年5月以降、アジアナ航空によるソウル－延吉便が、週1便から週3便に増便された。

これらの結果、2006年には、金剛山への観光客が年間24万人であったの対して、長白山の観光客は年間10万人に達した（朝鮮日報2007年10月4日）。韓国人観光客の一般的な長白山観光パターンをみると、延吉市内のホテルを早朝5時台にバスで出発、所要時間4時間で長白山山門に到着、シャトルバスと四輪駆動車に乗り換えて長白山天地には11時頃に到着する。同様に下山して長白滝を見学の後、延吉へ折り返すという日帰りコースが主体であり、延吉への帰着は20時以降である。つまり、韓国人観光客の旅程は、延吉で前泊と後泊の2泊となっている³⁾。

吉林省集安市に位置する「高句麗前期の都城と古墳」が2004年に世界文化遺産に登録された。集安の世界遺産に認定されて以降、韓国人観光客は集安へ移動し、長白山観光は大幅に減少し⁴⁾、代わりに国内観光ブームの中で、中国人観光客が長白山観光の主体となりつつある。現地の観光関係者によれば、韓国人の長白山訪問希望者ほとんどが、長白山観光を経験してしまったのではないかとの見方まである。

2) 延吉市の成長

延吉市は、延辺朝鮮族自治州の州都（州政府所在地）であり、市域の人口は420,370（2005年）と同州最大の都市である。民族別の人口構成は同州全体の傾向とは異なり、朝鮮族が24万2,565

（57.7%）で最大を占め、漢族が16万7,984（40.0%）である。延吉市における朝鮮族優位の傾向は、1990年代以降に、上述したような韓国人の大量の到着による経済成長にともない、同州農村部の朝鮮族を吸引してきたことによる。このため延吉市は「中国の中の韓国」または「世界最大の 코리아タウン」などと表現されてきた。延吉空港（延吉朝陽川空港）は、同州内唯一の空港であり、国内線では長春、瀋陽、大連、北京、青島、煙台、上海、広州、牡丹江、国際線では、ソウル（仁川）との直行便がある⁵⁾。

延吉市の都市景観は、1990年代以降、大幅な変化を遂げた。中国の大都市と同様に、建築物の分散的な近代化・高層化が進展する一方で、それらの間隙には改革開放前の老朽化した低中層建造物が混在する（写真1：巻末の写真ページ）。街路の標識や看板は、横書きハングル文字の下に漢字を併記する形式が通常である（写真2）。

市内中心部は、繁華な商店街と飲食店街に特徴づけられている。西市場と呼ばれる伝統的なマーケット、商店や露店が立ち並ぶ歩行者天国、朝鮮族伝統料理の犬肉料理店が立ち並ぶ狗肉街、これらを中心として、焼肉店、冷麺店、串焼き店、韓国式レストラン、日本式の喫茶店や居酒屋、ファーストフード店など、飲食店が高密度に分布している。聞き取りによれば、市内のタクシーは4,000台に上るほか、人口に対するカラオケやサウナの店舗数も全国トップレベルであるという。これらの消費傾向は、1990年代以降に急速に拡大した海外、とくに日韓両国への就学・留学による渡航を経て、海外からの送金による経済成長によって存立している。

近年には、ハングル表記を省略した店舗名表記も目立つようになった。これは、朝鮮族の児童・生徒が、漢族学校における英語教育を希望して入学する傾向にあることと関係がある。朝鮮族学校では、第一外国語として伝統的に日本語教育を取り入れてきたが、漢族学校による英語教育が朝鮮族を引き付けているようである。このことが、朝鮮族若年層の日本語離れ、ひいてはハングル離れを引き起こす要因ともなっている。

Ⅳ 図們江と国境観光

延吉を拠点とする国境観光の特色は、上述の「長白山観光」に加えて、「図們江観光」にある。延辺朝鮮族自治州と北朝鮮との国境線は総延長522.5 km、同じくロシアとの国境線は232.7 kmに及ぶ。長白山観光における天池訪問は、当初は天池対岸の北朝鮮側を望みたいという希望も加わり、国境観光としての位置づけも強かったと思われる。しかしながら、近年の長白山観光には観光開発の進展にしたがって長白滝や地下森林、長白山温泉など多様な観光要素が付加されたことと、既に金剛山観光や開城観光など北朝鮮国内における韓国人観光客の観光が定着したこともあり⁶⁾、中朝国境を展望する意味合いは次第に薄れつつあると考えられる。

そこで、本稿に述べる国境観光として、①図們江沿岸国境観光、②防川の中朝露三国国境観光の2つに関して、その様相について記述することとする。

延吉市に本拠を置く延辺日中文化交流センター運営のサイト「延辺旅行応援団」では、推薦コースとして、①防川・中朝露三国国境地帯観光 ②長白山天池、長白山滝、温泉浴観光 ③図們・北朝鮮国境橋観光 ④延吉市内観光 ⑤その他（イベント参加・ビジネス視察など）が挙げられている。同様に「地球の歩き方 大連・瀋陽・ハルビン 2008～2009年版」では、巻頭に中朝国境1300 kmと題して、丹東から防川までの中朝国境を紹介している。このように、延吉を拠点とする延辺朝鮮族自治州の観光は、「長白山観光」と同様に「国境観光」に焦点が当てられているといえる。

1) 図們口岸とその周辺

1-1) 図們口岸

図們市は延吉市の東28 km、図們江と布尔哈通河の合流点に位置する。人口は13.3万人（2005年）で、市街地が図們江ならびに対岸の北朝鮮・咸鏡北道に直接面する点では、図們江沿岸最大の都市である。図們駅は省都・長春をはじめ瀋陽やハルビンなど、東北地方の大都市を延吉経由で結ぶ長距離列車のターミナル駅となっている。

図們江には対岸の北朝鮮側へ渡るため8カ所に橋梁が架けられている。橋梁の河岸部には中朝両国それぞれの税関など、出入国管理所が置かれており、中国側ではこれを「口岸」と称する。図們江の口岸としては、上流部から古城里口岸、南坪口岸（対岸は茂山）、三合口岸（対岸は会寧）、開山屯口岸、図們鉄路口岸、図們口岸（対岸は南陽）、沙坨子口岸、そして圈河公路口岸が最下流部に位置する。このように、図們は図們江を渡って北朝鮮に至る唯一の鉄道橋と併せて2本の橋梁を有している。

図們口岸を訪れる観光客は、チケットを購入することによって、国境ゲート屋上の展望台から、眼下の図們大橋と対岸の南陽市の景観を眺めた後、人民解放軍兵士の付き添いの下、図們大橋上に引かれた国境線までを徒歩で往復することができる。図們口岸付近には、記念撮影用に「中朝辺境」などと表示された看板、北朝鮮製品を販売する土産物店、レストラン、ホテルが立ち並んでいる。図們大橋の下流側では遊覧船の運航もある（写真3、4）。

このことから、図們口岸は観光化された国境であることがわかる。この理由として、図們は伝統的に北朝鮮側との通商・交易によって繁栄してきた歴史があり、延吉から1時間圏内の観光地として、早期から韓国人観光客の訪問地として確立してきたことが挙げられる。兵士を撮影することは禁じられているが、兵士はしばしば笑顔で観光客に対応している。

1-2) 開山屯と三合鎮

図們口岸から図們江上流方向へ直線で約60 kmの区間が、図們江沿岸の国境観光ルートとして開拓されてきた。これは、図們市から、開山屯（開山屯口岸）を経由して、三合鎮（三合口岸）へと向かうルートで、対岸では南陽から会寧に対応する（図1）。

このルートは、図們江沿岸農村地域の国境景観を観察することに目的が置かれており、図們口岸のような都市的観光地は存在しない。開山屯から三合鎮にかけての図們江は、川幅が狭まるとともに蛇行がみられ、対岸の蛇行凸部（滑走斜面）に

は、土地利用の整った伝統的な農村集落が形成されていることがわかる。また、対岸には清津から会寧、南陽を経由して羅津を結ぶ咸北線の鉄道線路が併走する。中国側には朝鮮式家屋が道路に沿って街村集落を形成している。開山屯口岸には日本占領下に建設された鉄道橋が残存しているが、第2次大戦後は廃線となっているという。

三合鎮の展望台からは、三合口岸の対岸に、会寧市街地を遠望することができる。会寧市は図們江沿岸の主要都市として知られることから、韓国人観光客の関心は高いという。また、ルート上には農家楽（農家レストラン）も立地するなど、未発達ではあるが、典型的な国境観光ルートとして定着する可能性がある。

1-3) 凉水鎮

図們口岸から図們江下流部には、1945年、ソ連軍の追撃から敗走する日本軍によって破壊された橋梁「隠城大橋」が残存する（写真5）。隠城大橋は、図們市凉水鎮から対岸の北朝鮮・隠城を結ぶ橋梁であったが、当時の爆破によって橋梁の中央部分が欠落・流出しており、渡河不能である。そのため、凉水鎮側から橋梁への立ち入りに制限はない。河川敷には、行楽客向けの簡易な河川公園が設けられ、付近には農家楽があるなど、図們近郊の河川行楽地として位置づけられる。凉水鎮



写真5 図們市凉水鎮の旧隠城大橋（2008年）。写真中央が図們江、写真左手が下流側である。隠城大橋は、ソ連軍から図們江を渡って敗走する日本軍によって破壊された。図們江対岸は北朝鮮隠城郡である（筆者撮影）。

と対岸の隠城は一体的な盆地となっており、ボタ山が並ぶ鉱山景観を遠望することができる。同様の橋梁は、さらに図們江の下流部、琿春市屯湾子にも残存する。屯湾子の橋梁は、欠落部分が約20mと短く、河川の中心線から対岸寄りまで歩行できることが特色となっている。

2) 防川・中朝露三国国境

琿春市は人口21.6万の国境都市であり、対露朝韓日貿易の内陸港湾都市として位置づけられる。ロシア側との通商は、琿春長嶺子口岸（写真6）と琿春鉄路口岸の2ルートを通して行われており、ウラジオストク、ウスリースク、ザルビノ、ポシェトなどロシア沿海州の主要都市・主要港湾と結びついている。これら2つの口岸は、図們江を越えることなく、陸上の国境に位置している。ロシア側からの買物ツアーも盛んで、琿春市内の商店には、ロシア語の看板が目立つ。2009年には、前述の東春号（白頭山航路）が新東春号として、新たに新潟に寄港することによって、ザルビノ（ロシア）—東草（韓国）—新潟—ザルビノの順に、日本海を三角形に描く航路が開設される予定である。これによって、現在は大連を経由する延辺—日本間のおもな貨物輸送に対して、新たに琿春—ザルビノ経由のルートが付加されることに注目が集まっており、さらには、新潟からザルビノを経由して琿春へ到着する新たな日本人観光客の出現にも期待が寄せられている。

一方、北朝鮮側との通行は、琿春市街地から約35kmの圈河公路口岸によって行われている。圈河公路口岸は、図們江沿岸では最大の口岸となっている。その理由は、北朝鮮の自由貿易経済区である羅津・先峰地区に最も近接するためである。中国人による北朝鮮観光が近年増加しているが、延吉や図們を発地として、羅津・先峰地区を着地とする旅客の出入国は、圈河公路口岸を通して行われている⁷⁾。

このような琿春市の性格は、防川における中朝露三国国境の展望観光に意味を持たせている。琿春市敬信鎮防川は、琿春市街地から60kmに位置し、中国領土が日本海に最も近接する場所として、近年その価値を高めてきた。

防川展望台「望海閣」は、国境警備のための監視塔に展望台が併設されたもので、人民解放軍によって管理されている。防川展望台から、図們江河口、すなわち日本海までの距離は15 kmである。望海閣からの展望は南に向って、中央に図們江、右手に北朝鮮、左手にロシアとなっており、北朝鮮・豆満江駅ーロシア・ハサン駅間を結ぶ図們江の鉄橋上に、朝露国境線が引かれている(写真7)。好天に恵まれれば、図們江デルタをとおして、日本海の水平線を眺望することができる。中国人観光客にとっては、「望海閣」の文字通り海(日本海)を展望することが主要な目的である。この地域では海に面していない中国が、図們江開発計画を積極的に推進してきた地理的背景を、「望海閣」からの展望によって理解することができる。

3) 現地住民と国境観光

延辺を訪れる韓国人や日本人の観光客にとって、とりわけ中朝国境を越境することは不可能であり、図們江は完全に閉鎖された国境となる。その一方で、現地の朝鮮族や漢族にとって、図們江は透過性のある国境として認識されている。彼らにとって北朝鮮は最も近い外国であるとともに、海に面していない同州からは、海水浴を目的とする行楽地であるとの認識もある⁸⁾。

延吉市内の旅行社に置かれた延吉発のツアー旅程表をみると、国境観光として①朝鮮羅津・先峰2日間、②会寧、清津、鏡城2日間など、1泊2日の簡易な旅程が掲載され、双方ともに海水浴や海浜見学が組み込まれている。

聞き取りによれば、1970年代の中国を彷彿させる雰囲気があるため、高齢者にとっては改革開放前の懐かしさ感じることや、「中国人観光客」としての歓待を受けることなどが理由として挙げられた。また、朝鮮族は年少時から、海水浴や親族訪問などで国境を往来してきたことから、近年の経済格差の拡大にともなって、生活習慣や生活文化にも双方に差異が生じていることに、異境を感じるという。1970年代までは、北朝鮮側が鉱産資源を背景とする工業化によって相対的に成長する一方で、延辺地域は中国におけるまさに「緑辺地域」として発展途上であったことから、時代

の変化を感じるという談話も聞かれた。

V おわりに

延辺朝鮮族自治州における在日新華僑の送出口プロセスには、国境地域としての地域性が反映していることがわかった。その一例を挙げると、防川の国境景観は、延辺朝鮮族自治州が内陸に位置していることを改めて認識させるものである。しかしながら、1991年の図們江開発計画と1992年の中韓国交樹立を契機として、延辺朝鮮族自治州の関係位置は、韓国との国境地域へと移動した。このことは韓国企業の大規模な進出と韓国人観光客の大量の到着によって示されている。これは、韓国、さらには日本への渡航が促進された初期要因の一つと考えられる。

観光の側面からみると、州都・延吉市は、韓国人観光客にとって長白山観光ルートの拠点都市と位置づけられてきた。とりわけ、彼らの目的地である長白山天池が中朝国境に位置することは、韓国人観光客を惹きつける要因の一つであったことは確かであろう。図們市や琿春市の観光景観もまた、国境都市としての性格を反映したものとなっている。

最後に、2008年8月に開港した白山長白山空港と、2009年1月に開業した東北東部鉄道について触れておきたい。

2008年8月3日に長白山空港(正式名称:白山長白山空港)が中国で最初の森林観光空港として、白山市松江河鎮近郊に完成し、長春からの第一便の到着によって正式に開港した。当初は北京、長春線、今後の計画では、瀋陽、大連、上海、深圳、広州へと路線が拡大される。前述のとおり、韓国人観光客の長白山観光が減少するなかで、さらにこの路線網の拡大によっては、将来的には長白山観光の観光客が延吉を経由しなくなることが危惧されている。

東北東部鉄道は、大連と瀋陽から丹東ー通化ー二道白河ー和竜ー図們を経て、黒竜江省牡丹江市の綏芬河に至る鉄道で、遼東半島から長白山、さらには中朝国境と中露国境を連結することになる。このうち、2008年12月に二道白河ー和竜間

が新線として開通していたが、2009年1月、和竜-丹東間で一番列車が運行された。なかでも二道白河は長白山の最寄り駅として、丹東方面と直結することにより、利便性は大幅に向上することが指摘されている。二道白河では、大規模な都市建設が進行しており、長白山麓の宿泊拠点として整備が進みつつある。

このように、延辺朝鮮族自治州および延吉の地理的位置は刻々と変化しつつあるが、国境地域に位置する地域特性を、観光に反映させる試みが進められている。延吉市をはじめ各市・各県の個性と多様性を見出すことによって、新たな観光ルートを創出することも、今後の主要な課題となるであろう。

謝 辞

2009年3月に立教大学観光学部を定年退職される白坂蕃先生に感謝してこの小論を献呈いたします。

本稿の作成に当たり、日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究(B)(海外学術調査)「増加する華人ニューカマーズの中国における送出プロセスの解明」(研究代表者:山下清海,課題番号18401035,平成18~20年度)の一部を使用した。

現地では、延辺大学の金永燦先生、延辺日中文化交流センターの崔明玉さんをはじめとする延辺朝鮮族自治州の皆様には、資料の収集から、インタビュー、現地踏査の手続きなどに際し、多大なご協力を賜るとともに、便宜を図っていただいた。末筆ながら、記して心より御礼申し上げます。

注

- 1) 中国朝鮮族が跨境民族であるとの記述は、環日本海学会編(2006)による。
- 2) 長白山(チャンバイ山)は中国名であり、韓国・朝鮮語では白頭山(ベクトゥ山)と呼称が異なる。本稿では中国側からのアプローチであることから長白山の名

称を用いる。

- 3) 韓国人観光客のツアーには、北朝鮮レストランでの夕食が組み込まれていることが多く、ここでは、本国から派遣された女性服務員による配膳と歌唱・舞踊が披露されている。
- 4) 長白山の観光関係者は、推測ではあるが、長白山を訪れる2008年の韓国人観光客は、前年のおよそ30%と語った。
- 5) 2008年の夏季ダイヤによる。
- 6) 金剛山観光は2008年7月の韓国人女性観光客射殺事件により中断、同年12月以降、開城観光も中断している。
- 7) 2007年に園河公路口岸経由で羅津・先峰地区を訪れた中国人観光客は約1万7900人である。
- 8) 園河または図門の口岸を経由する北朝鮮観光は「延辺州特色観光」と呼ばれる。

引用文献

- 延辺州統計局編(2006):『延辺統計年鑑2006』延辺州統計局。
- 伊藤亜人・大村益夫・梶村秀樹・武田幸男・高崎宗司監修(2000):『新訂増補 朝鮮を知る事典』平凡社,611p。
- 環日本海学会編(2006):『北東アジア事典一環日本海圏の政治・経済・社会・歴史・文化・環境』国際書院,324p。
- 呉羽正昭(2003):Saar-Lor-Lux 国境地域における人口流動。人文地理学研究,27,155-170。
- 三原義久(2003):クロスボーダーツーリズムの観光実態に関する考察—形態別ボーダー観光の現状を事例として—。大阪明浄大学紀要,第3号,71-78。
- 千 相哲(2004):東アジアにおける国境地域と観光。九州産業大学商経論叢,44(4),163-185。
- 鄭 明子(2003):中国朝鮮族の雇用問題と人口移動—吉林省・延辺朝鮮族自治州を中心に—。地域と社会(大阪商業大学比較地域研究所),第6号,117-148。
- Timothy, D. J. (2001): *Tourism and political boundaries*, Routledge, London, 219 p.
- 山本正三・奥野隆史・石井英也・手塚 章編(1997):『人文地理学辞典』朝倉書店,525p。
- 山下清海(2007):第二次世界大戦後における東京在留中国人の人口変化。人文地理学研究,31,97-113。
- 山下清海・尹 秀一・松村公明・杜 国慶(2008):在日華人ニューカマーの中国における送出プロセス—中国東北地方の事例から—。2008年人文地理学会大会研究発表要旨,128-129。

「写真1~4, 6~7は巻末写真ページを参照」

松村：中国吉林省・延辺朝鮮族自治州における国境観光の地域的特色（すべて筆者撮影）



写真1 延吉市中心部の都市景観（2008年）。1988年開業の白山ホテル（延辺白山大廈）から、局子街と並んで延吉市中心部を南北に貫くメインストリート、光明街を望む。



写真2 ハングルと漢字が併記された延吉市内における建物の看板表示（2006年）。横書き看板の場合、表示の順は上段がハングル、下段が漢字である。近年にはハングル表記が省略された表示も増えてきた。



写真3 図們口岸の国境景観（2006年）。写真左奥は図們大橋、図們江の対岸は北朝鮮の南陽である。記念写真用の表示板は中朝の友好関係を表している。



写真4 図們口岸の観光地化（2006年）。図們口岸付近は、土産物店やホテルが立ち並ぶ。土産物の多くは「北朝鮮の商品」である。写真奥は図們口岸の国境ゲートで、屋上は展望台になっている。



写真6 琿春市長嶺子口岸（2008年）。延辺朝鮮族自治州では、中露国境を道路で越える唯一の口岸である。写真中央は、ロシアから入国手続き中のバスである。

写真7 琿春市防川の「望海閣」から望む中朝露三国の国境景観（2008年）。写真中央の図們江を境に、左手（左岸）がロシア、右手が北朝鮮である。写真中央奥の図們江を渡る鉄橋は朝露間を直接結ぶ鉄道橋。図們江は防川からおよそ15kmで日本海に注ぐ。一見のどかな風景であるが、眼下の標識は、ここが重要な国境地帯であることを改めてアピールしている。

